広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Comment Screenを用いたハイブリッド授業の構築に向けた考察 ：大学での日本語文章表現指導と中・高等学校国語科におけるICT活用を中心に
Author(s)	後藤田, 和
Citation	論叢 国語教育学 , 17 : 31 - 40
Issue Date	2021-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/52309
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052309
Right	
Relation	

Comment Screen を用いたハイブリッド授業の構築に向けた考察

―大学での日本語文章表現指導と中・高等学校国語科における ICT 活用を中心に―

後 藤 田　和

１　はじめに

新型コロナウィルスの感染拡大によって、2020 年度は多くの学校現場でオンラインによる授業が実践されるようになった。大学教育においても例外ではなく、各大学によってばらつきはあるものの、さまざまな ICT を用いた授業が実践されてきた。

こうした情勢のなか、オンラインによる授業実践の集成として、例えば高等教育機関のものであれば、大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介編『遠隔でつくる人文社会学知：2020 年度前期の授業実践報告』（雷音学術出版、2020、以下、『遠隔でつくる』）、および同編者の『オンライン授業の地平―2020 年度実践報告―』（雷音学術出版、2021、以下、『オンライン授業の地平』）などが刊行されている。　両著とも全国から 100 名以上の高等教育機関に所属する教員が実践を寄せており、『遠隔でつくる』では 148 件、『オンライン授業の地平』では 119 件の実践報告が掲載されている。[1]

また、初等中等教育での ICT を用いた国語科の授業実践集として野中潤編著『学びの質を高める！ICT で変える国語授業―基礎スキル&活用ガイドブック―』（明治図書出版、2019）および同編著者『学びの質を高める！ICT で変える国語授業 2―応用スキル&実践事例集』（明治図書出版、2021）などが刊行されている。

基本的に対面での授業はなくなり、オンラインでの授業となった 2020 年度の授業実践では、双方向型のツールとして Zoom や Microsoft Teams などが用いられることがほとんどであり、オンデマンド型のツールとしては各大学のポータルサイトを通して PowerPoint に音声を録音したスライドショーを掲示したり、YouTube にアップロードしたりする方法が多く用いられているようである。

こうした 2020 年度の大学教育の動向について、いち早く反応した吉見俊哉（2021）が「実を言えば、大学教育は、しようと思えば前からかなりの程度、オンライン化できたのである。大学はこれまでオンライン化できなかったのではなく、しなかったのだ。2020 年春、選択の余地がないところに追い込まれ、大学教育のオンライン化は一瞬で革命的変化を見せた」[2]と指摘しているように、劇的な変化が大学教育において起こった。これに続けて吉見は次のような問題点も指摘する。

> 大学は授業をオンライン化することでは劇的転換をして見せたものの、今度は教室を封鎖状態から解いていく方法が見つからなくなった。オンライン化が必ずしもうまくいかなかった分、小中学校が努力を重ねながら授業を再開させたのに対し、大規模に授業をオンライン化させた大学は、リスクを極小にしようとするあまり、2020 年秋学期になっても実質的に対面授業を再開させる方法が見つけられずにいる。もちろん、社会から批判を受けて「ハイブリッド授業」という名の「対策」を導入して、名目上対面でも授業している体裁をとっている大学も多い。

[1] 両著とも雷音学術出版の web サイト（https://sites.google.com/view/lionpress/）で無料公開されており、ダウロードすることも可能になっている。

[2] 吉見俊哉（2021）『大学は何処へ　未来への設計』岩波書店、p.5（なお、漢数字を算用数字に改めて引用した。）

しかし、オンラインと対面の授業をどう効果的に組み合わせていくのかという実行可能なプランを持ち合わせているわけではない。[3]

この吉見の指摘において、現在でも模索されているのはオンラインと対面の「ハイブリッド授業」を試みる場合、「オンラインと対面の授業をどう効果的に組み合わせていくのか」という点であろう。

吉見の調査の動向に付け加えると、2020 年 12 月 23 日に文部科学省から出された「大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査」によれば、10 月 16 日から 12 月 18 日までの期間、調査対象校（377 校）のうち約半数の 190 校は授業全体の半分以上を対面で実施している[4]、という結果が提示されている。

また、『朝日新聞』2021 年 5 月 17 日の朝刊では、東京大学の大学経営・政策研究センターが 2020 年 12 月から 2021 年 2 月まで、全国の国公私立大の教員約 7300 人を対象（質問状を送り、2996 人（回収率 41%）から回答を得た）として実施した全国大学教員調査 2020『コロナ禍後の大学教育』の結果が報じられ、調査結果によると、昨年の秋学期（後期）に各教員が授業を実施した科目のうち約半数がオンラインだった。受講者が 50 人以上の講義のオンライン比率は 70%、主に少人数で行われる「演習・ゼミ・論文指導」は 42%、「実験実習」は 26%となっている。[5]

こうした調査結果からは、吉見が指摘していることとは対照的に、対面での授業を取り入れる大学が増加してきていることを表している。しかし、「オンラインと対面をどう効果的に組み合わせていくか」という課題に関しては、ほとんど試行錯誤の段階であると言える。

そこで、本稿では、オンラインと対面を効果的に組み合わせて、授業を展開する 1 つのツールとして「Comment Screen」というアプリの導入について考察したい。後述するように Comment Screen を導入することにより、オンラインと対面、両方の授業において、学習者の授業への主体的な参加を促す効果を得られるのではないかと考えている。というのも、論者は昨年度から、広島経済大学で「日本語文章表現」という科目を前期に 1 コマ担当しており、昨年度前期の授業では学内のポータルサイト（HUENAVI）を利用しながら、完全オンラインでの授業を実施した。（詳しい授業の内容については、先述した『遠隔でつくる』に寄稿しているため、そちらを参照していただきたい。）32 名 1 クラスを担当し、Zoom などの双方向型のツールは用いず、オンデマンド型で授業を実施した。PowerPoint に音声を録音したスライドショーや、PDF 化した授業資料をポータルサイトに掲示し、それを学生が参照しながら課題に取り組む、という流れで授業を実施した。授業をするなかで、やはり最も気になったのは、学生に自分の伝えたい内容がきちんと伝わっているかどうか、であった。

そうした中で、今年度も同じ授業を担当することになり、4 月中は対面で授業を実施することができた（緊急事態宣言発令のため、5 月からは前年度同様のオンライン授業へ移行）。その際、感染防止対策の徹底のため、学生に発言させることを極力控えたい反面、どのように学生の疑問や意見を円滑に授業に取り入れるかを模索していたところ、Comment Screen の存在を知った。授業に取り入れようと、4 月段階で試験的に簡単な問題を提示し、Comment Screen を使用して学生に解答させる活動をしたのだが、あえなくオンライン化してしまい、論者自身はほとんど実践ができていない

[3] 吉見前掲書　p.5（なお、漢数字を三洋数字に改めて引用した。）

[4] 文部科学省（2020 年 12 月 23 日）「大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査」https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html より

[5] 「オンライン授業、大学教員の本音」『朝日新聞』、2021 年 5 月 17 日）

状態である。しかし、機能の確認程度の試験的な運用であっても、学生の反応は良かったように感じられた。そうした経験を踏まえて、Comment Screen 導入の可能性について検討してみたい。

また、大学における日本語文章表現指導だけではなく、昨今の中学校や高等学校などの中等教育における ICT を用いた国語科教育との関連についても考察の射程をのばし、ICT の効果的な導入について考察を試みる。

2　Comment Screen について

Comment Screen は一般社団法人筑波フューチャーファンディングと筑波大学に在学中のエンジニア冨平準喜との共同チームによって開発されたアプリケーションで、2019 年 4 月 8 日より web で提供されることとなった。[6]これまでの大学の講義など、プレゼンテーションで用いるツールとして PowerPoint などが主流であるのだが、そうしたアプリでは、プレゼンテーションの形式がほとんど発表者から観客へという一方向的なスタイルであったことに課題があった。この課題を解決するために開発されたのが、Comment Screen である。使用方法は非常に簡単で、プレゼンテーションをする側の PC にこのアプリをインストールし、アプリを開くと「ルームを新しく作る」と表示されるので、そこに講義名などを入力することで、準備は完了である。プレゼンの聴衆や学生とは、そのルームの URL や QR コードなどを共有することができ、手持ちの PC やスマートフォンでアクセスすると、コメントを入力できるようになる。スマートフォンで Comment Screen の URL にアクセスした際に開かれる画面が左に示した【画像】である。ここにコメントを入力すると、教員側の PC の画面上に入力したコメントが画面上を一方向に流れていくようになる。類似のものとしては、ニコニコ動画などのコメント機能を思い浮かべてもよいだろう。また、入力したコメントには、入力者の名前は表示されず、スマートフォン上の画面にも入力したコメントのみが表示されるため、匿名性が高い状態で学習者がコメントを行うことができる。ここに Comment Screen の最大の特徴があると言えるだろう。さらに、コメントだけではなく、【画像】の下部にあるような顔文字やマークなどのスタンプを入力することで、そのスタンプが画面上に表示される、という機能も備えられている。この機能を使うことで、コメントが思いつかない学習者もそれらを入力することで、授業に参加している、という感覚を得ることができ、授業者にとっても学習者の反応を確認することができる。

【画像】

このアプリを使うことによって、オンライン授業では、Zoom で教員の画面を共有しているとき、対面授業では、PowerPoint のスライドショーを大型スクリーンに投影し

[6] Comment Screen についての概要は https://commentscreen.com/company を参照。（最終閲覧日 5 月 30 日）なお、無料で利用する場合は 20 人まで同時に接続することができ、教育向けのプランでは月額 1200 円（年間 14400 円）で 100 人までの同時接続、月額 1500 円（年間 18000 円）で 500 人までの同時接続が可能なものがある。

ているときに、学習者がコメントした内容が即時に画面上に表示されるようになり、非常にスピーディに授業者と学習者のやり取りが可能となる。開発者側は、このアプリを使用した際、観客、つまりコメントを入力する側には「飽きずにプレゼンターの発表を聞ける」「分からない点などをリアルタイムで聞くことができる」といったメリットが、授業者側には「『聞いてもらえている』と分かり、モチベーションが高まる」「QA で回答できない場合もよく知っている観客から回答のサポートをもらえる」などのメリットがあると指摘している。

さて、このアプリを使用した授業実践についてであるが、そもそも、このアプリ自体が製作されて間もないこともあり、授業での実践などはほとんどない。[7]しかし、1 において示した『遠隔でつくる』における山崎玲美奈氏による実践[8]で Comment Screen が導入されている。この実践では、ビデオ会議システム Zoom の使用中に Comment Screen の機能を活用することで、随時学生とやり取りを行うことで、「匿名性のコメントが出来たため質問のハードルが下がった」といった学生からの反応があったことが報告されている。

また、Comment Screen を導入する授業の受講者人数の規模に関して、論者自身の私見にはなるが、100 人以上の大規模な講義よりも、20 人から 40 人程度の中規模な講義で利用するほうが、得られる教育効果が大きいのではないかと感じている。今年度 4 月に広島経済大学で試験的に導入した「日本語文章表現」のクラスは 30 人程度の規模で、PowerPoint のスライドショーを大型スクリーンに投影して、QR コードを表示し、それを学生にスマートフォンで読み取らせて、簡単な問題にコメント機能で答えさせたり、文章表現の正誤をたしかめさせたりしたところ、学生の反応もよく、スムーズに授業の進行をすることができた。もちろん、こうした簡単なやり取りや授業人数が少なければ、口頭で学生とすればよいのでは、という意見もあるであろうが、新型コロナウィルスの感染拡大によって、グループワークによる話し合いや発言をすること自体が憚られることなどを鑑みると、スマートフォンですぐさま学習者の反応を確かめることができる、という利点があると言えるだろう。また、100 人以上の学習者によるコメントや意見、質問などが同時に画面上を流れることによって、授業者がその情報量を処理できず、うまく授業が展開できないのではないか、という考えからも、中規模な授業での導入を提案したい。

ただし、そうしたメリットだけではないことも実際に使用して明らかになってきた。例えば、匿名であるがゆえ、参加しない学習者がいても授業者が把握しづらいことや、意見が画面上に流れるという性質上、すぐに消えてしまうので、振り返りはしづらいことなどが挙げられる。前者に関しては、匿名性を高めて質問や意見をするハードルを下げた反面、どの学習者がどういった内容のコメントをしたのかがわからなくなり、さらに、授業とは無関係な内容や不適切な内容をコメントで入力してしまう可能性も出てきてしまう。そうした場合に備えて、事前に学習者にアプリを導入する趣旨や注意点を伝えることが肝要となるだろう。また、後者に関しては、アプリの画面上に入力されたコメントが履歴として残ることを踏まえ、流れたコメントをもう一度読み返してみたり、授業者側がコメントを取り上げてみたりするなどの工夫が求められることとなる。

---

[7] 東京大学の稲見昌彦氏が web 上（https://note.com/drinami/n/n2a8754e6be09）で Comment Screen を Zoom と連携させて講義を行った感想を述べたものが掲載されており、授業者にとっても学習者にとっても概ね好評だったことが語られている。また、遠隔授業で Comment Screen を導入することで、「物理空間では『空気を読み』一見おとなしい学生たちが積極的に発言する」、「その発言を拾うことでインタラクティブに講義を展開できる」などの効果が期待できると指摘している。（最終閲覧日 5 月 30 日）

[8] 山崎玲美奈（2021）「A 大学における『韓国語入門』（1 年生対象）授業実践報告」大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介編『遠隔でつくる人文社会学知：2020 年度前期の授業実践報告』雷音学術出版、p.36

こうしたメリット、デメリットを踏まえ、改めて Comment Screen の教育的効果を整理すると次のようにまとめることができるだろう。

・匿名性を高めることで、授業内の学習者の発言（コメント）が積極的になる。
・学習者は常に発言（コメント）できる状態であるため、授業に積極的に参加することができる。
・学習者の発言（コメント）を授業者は即座に確認できるため、授業展開をスムーズにできる。

３　ICT を用いた大学における日本語文章表現指導

では、オンライン化に移行していった他の大学での日本語文章表現の授業がどのように実施されたのだろうか。

まず、大学での日本語文章表現科目の先行実践（留学生を対象とした授業を除く）に関しては、１で挙げた『遠隔でつくる』、『オンライン授業の地平』および田中宏幸の授業実践が報告されている。これらの実践では、対面ではなく、すべてオンラインでの授業実践が報告されており、大別すると、ビデオを通信による双方向型の授業と、事前に録画・録音した授業動画を視聴するオンデマンド型の授業に分けられる。

前者に関しては、廣瀬航也による実践[9]や市川紘美によるの実践[10]が挙げられる。両者とも、Zoom による双方向型の遠隔授業を行い、授業連絡や資料の配信、授業課題とフィートバックなどに関しては、廣瀬は学生ポータルサイト、市川は Google Classroom で行っている。

後者に関しては、北田雄一による実践[11]、宇都伸之による実践[12]、奥村華子による実践[13]、増地ひとみによる実践[14]が挙げられる。北田の実践では、学生がスマートフォンで講義を受講し、教科書を所持していないことを前提に授業が進められている。スマートフォンのみでも簡単に授業資料にアクセスできるように、教科書の該当ページを PDF 化し、ポータルサイトにアップロード、課題提出は授業者が個人的に使用しているメールアドレスへ行われた。

宇都による実践では、PowerPoint のスライドショー機能を用いて、音声を録音した授業動画を作成、YouTube で履修者のみに限定公開し、学生がその動画を視聴したのち、課題を Microsoft Forms で提出する、という流れで授業を展開している。考察では、授業を動画として配信することによって、繰り返し視聴しながら学習に取り組めるため、文章の質が飛躍的に向上したと述べられている。

奥村による実践では、Google Classroom と Meet の使用による録画配信を行っている。動画編集アプリ iMovie を使用して、授業の最初と最後に授業者が顔を出してフィードバックなどを行うパートと、PowerPoint に音声を録音したスライドショーのパートを合成し、20～30 分程度の動画を 2 本配信し、復習用として PowerPoint を PDF 化したものを Classroom 上で掲示するといった措置をとっている。

増地ひとみによる実践では、Microsoft Teams を主なツールとして授業連絡や資料の配信、授業課題とフィートバックなどを行っている。科目ごとに「チーム」が設定され、担当教員と受講生のみ

---

[9] 廣瀬航也（2021）「尚絅学院大学『日本語表現法』（2 年生対象）授業実践報告」注 8 に同じ、p.29
[10] 市川紘美「東京女子大学『日本語表現法』（1・2 年生対象）授業実践報告」注 8 に同じ、p.50
[11] 北田雄一「大阪産業大学『文章表現演習/表現力基礎演習』（1 年生対象）授業実践報告」注 8 に同じ p.68
[12] 宇都伸之「北陸大学『日本語リテラシー』（1 年生対象）授業実践報告」注 8 に同じ、p.108
[13] 奥村華子「名古屋芸術大学『日本語表現』（1 年生）授業実践報告」大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介編『オンライン授業の地平―2020 年度実践報告―』雷音学術出版、p.34
[14] 増地ひとみ「愛知淑徳大学『日本語表現 A1』（2 年生以上）授業実践報告」注 13 に同じ、p.95

がアクセスし、ファイル閲覧や書き込みができるようになっているという。掲示資料は PDF による授業のレジュメとボイスレコーダーに録音した講義音声などを使用している。

最後に、田中宏幸の実践[15]では、先に見た実践の後者、すなわちオンデマンド型での授業実践が報告されている。学生の Wi-Fi 環境や大学の回線容量を考慮した結果、オンデマンド型の授業を選択しているが、そうした授業では授業者と学習者、および学習者間で顔を合わすことないため、対話も生まれにくいという課題があるとして、授業方法の再構築を図っている。この課題を解決するために指定テーマを設定した「200 字限定作文」を取り入れ、次のような学習サイクルを構築した。

> 「文話（文章表現に関する解説）を聞き、課題内容を理解する」→「構想を練る」→「200 字作文を記述・入力する」→「作品集を読み、メッセージを贈り合う」→「もらったメッセージを読む」→「優秀作から表現技術を学ぶ」→「自分の文章を振り返る」→「次の課題を理解し、構想を練る」[16]

この学習サイクルの確立、継続によって学習者たちの同士が学び合っていくことになり、特に、オンライン上で「作品集を読み、メッセージを贈り合う」ことと「もらったメッセージを読む」という段階を取り入れることによって「主体的で対話的な学び」を実現する可能性を提起している。

こうした先行実践を踏まえた上で、Comment Screen を導入し、その良さを引き出す方法として考えられるのは、（システム上、双方向型の授業にしか取り入れられないが）学習者によって書かれた文章を相互批評する活動に取り入れることであろう。あるいは、授業者側が例文を用意しておいて、PowerPoint などで示し、その例文を批評させる、といった活動である。Comment Screen の画面上にコメント履歴が残ることから、各学習者が入力した批評が即座に全員で確認可能となる。指名して発言させたり、挙手させて発言させたりするよりも、円滑に授業を進行できると同時に、授業者と学習者間、および、学習者同士の考えを相互に伝達することができるといったインタラクティブな授業が展開できるようになるだろう。

４　ICT と国語科教育の現在

２において、Comment Screen を導入する際の人数の規模に関して、論者は 20 人から 40 人程度のほうが、教育効果が大きいのではないかと指摘した。実際論者が 30 人程度のクラスで導入してみた経験から、この規模の人数は初等中等教育における 1 クラスの人数とも重なり、そこでの授業でも Comment Screen を導入できるのではないかと実感した。では、ICT を活用した国語科教育ではどのような実践が行われているのかを確認しよう。なぜ国語科かというと、論者は 2019 年から昨年度まで広島県の公立高校で 2、3 年生の現代文 B と古典 B を担当しており、実物投影機を大型テレビに接続して、文章表現の添削例を示すなどの ICT 機器を用いた実践を行っていたからである。

国語科における ICT 活用の利点として野中潤（2017）は、次の 5 点を提示している。

(a)　従来の黒板やホワイトボードの機能をより効率的に実現する。
(b)　従来の媒体では不可能であった教材提示、情報提示を可能にする。
(c)　教室内での相互交流や情報共有を活性化し、学習内容の理解を促進する。

---

[15] 田中宏幸（2021）「オンライン授業による日本語文章表現指導の開発」『安田女子大学紀要』（49）
[16] 田中前掲論文、p.2

(d)　学習のプロセスや成果を把握しやすく、よりきめ細かい評価が可能になる。

(e)　課題の発見と解決に向けて主体的・共同的に学ぶことに寄与する。[17]

この中でも、(a)～(d) は従来型授業の機能の代替や拡充という側面が大きいが、(e) に関しては「情報機器の使用を教員だけに留めるのではなく、むしろ生徒が活用することに足を踏み出すことで、教科書とプリントだけでは不可能であった学びを実現する」という「従来型の授業とは異なる位相に学びを進化させる可能性」があると野中は指摘する。

(a) から(d) に関する実践として、藤田勝如（2016）では、中学校国語科における ICT 機器、特に電子黒板と iPad の活用についての利点を述べている。電子黒板の活用については、⑴映し出した物に書き込める、⑵ベン図やマインドマップなどのシンキングツールを作成する際、全体で分類、または発想を膨らませる作業を効率的に行いやすい、⑶生徒のパフォーマンスの道具として活用する、という 3 点のメリットを提示している。

⑴に関しては、PowerPoint や keynote などのツールがあるが、書き込みの範囲の制限がなく、また書き込む順序や決まった語句にとらわれずに進行できる点で、電子黒板が国語科に適したツールであるという。また、⑶に関してはグループでの活動から作成したものを全体で共有するといった場合、書画カメラと連携することで、電子黒板上にすべてのグループで作成されたものを一覧にして示すことができ、それらをズームで見やすくしたり、直接書き込んだりすることで、単なる成果物の読み上げるだけの発表から、補足説明を付け、書き込みながら効果的に伝える技術を習得するのに効果的であるという。

また、野中が可能性を見出す(e) に関わるものとして、従来型の授業では見られなかった学習者の反応があった実践を確認していく。

まず、青柳圭子（2020）では ICT 機器に触れる導入段階でもある中学 1 年生を対象に、1 人 1 台の iPad を用いた文章読解や、学習者が友達に勧めたい本を 1 冊選び、PowerPoint のスライドを作成し、プレゼンテーションするブックトークの実践を報告している。この実践を通して注目すべきこととして、青柳は「どの活動においても活発な意見交換をもたらして」おり、「従来の授業に比べて明らかに能動的になっている分、理解が深まっている」ことを挙げている。

また、高井太郎（2018）は、中学校 1 年生を対象に、作文ワークショップをどのように ICT を用いて効果的に行うかを検討している。この実践では、生徒が 1 人 1 台の Chromebook を使用可能（タイピングや操作に慣れている）な状態で、「学習管理システム」として「Google クラスルーム」（以下、クラスルーム）や、「アンケート集計と整理を即時に行うことができるアプリケーション」として、アンケート結果の整理ができる「Google スプレッドシート」（以下、スプレッドシート）、即時に集計できる「Google フォーム」（以下、「フォーム」）、そしてワープロの機能を持ち共同編集作業やチャットを行いながら原稿を作成できる「Google ドキュメント」を用いて、学習を展開させている。高井は、そうした実践を通して、⑴学習者の把握の難しさ、⑵学習者同士の交流を活性化させる手立て、⑶個の学習者への教師の指導の充実、⑷推敲活動を行わせながらも書き直しの負担を軽減すること、といった 4 点の課題について考察している。

これらの課題のうち、特に⑶について詳しく見ていくと、「クラスルーム」「スプレッド」「フォーム」を連携させ、授業の中で他者の作文を参考としたり、自分と似たような作文を書いている生

[17] 野中潤「教育 ICT と国語教育学の課題（1）」『都留文科大学研究紀要』第 85 集、2017、pp.95-96

徒に書く内容を相談したりできるという声が生徒から出ており、学習者同士の交流を活性化させる手立てとして有効であったことが指摘されている。

次に、北野優樹、田中満公子（2019）では、高等学校 3 年生を対象に、教材内容を理解すると同時に情報活用能力を育むことを目的として、主に学習者が自ら PowerPoint を編集するという活動を取り入れている。まず、〈連続型テキスト〉としての教材を読み、それらを PowerPoint〈非連続型テキスト〉に図解化、最終的にまとめた内容をプレゼンテーションするという流れである。学習者同士の交流を通じて文章をスライドへと変換していく作業は、本文内容の理解に留まらない深い解釈を導き出したり、本文にはない具体例を示したり、筆者の主張に対する反論を行ったりする学習者などがいたという。これは、一方的に教員の話を聞く講義型の授業では起きにくい、対話的・主体的な深い学びが「PowerPoint を編集する」、「本文内容をスライド 1 枚に図解化する」という方法によって成り立ったことを示している。

これら実践のように、ICT を活用することによって、従来型の授業よりも、学習者の課題への取り組みが主体的になるとともに、学習者自身が他者の意見や考えに対話的に反応するといった効果が得られることがわかってきている。特に、高井の実践では、田中が確立した学習サイクルに近い状況を高等学校においても実践できることを示しており、実際に面と向かって意見を交流せずとも、学習者が自分の意見や感想を「書くこと」を通して伝えようとするため、意見交流の質も向上したのではないかと考えられる。

最後に、戸川貴之（2021）の実践を見ていこう。戸川は、高等学校国語科において、主に①Classi、②Padlet、③ZOOM ミーティングの実践とその教育効果について論じている。①では、特にクローズドなアプリケーションであることと、生徒個々の名前が登録されアンケートとなどを行った時に、誰が投稿したものかを教員側で掌握できるところなどが利点として挙げられている。また、②Padlet が主体的な学びを中心とした国語科の授業を活性化させるのに最も適したアプリケーションの一つではないかと指摘している。特に評論文読解時の調べ学習を行う際にブレインストーミングを行ったり、調べた内容を共有したりするのに有効なようで、生徒個々の意見を記述するのみならず、Web 上の記事や写真などを引用して掲載することができることなどが即座にできることをその利点として挙げている。

そうした授業実践のうち、国語科教育の活動における教育効果として次の 3 点を提示している。

⑴インターネットを介したビッグデータとの接続
⑵電子黒板による資料提示により板書時間の短縮と板書の書写活動削減、それに代わる諸活動の充実
⑶アプリケーションの同時編集機能を利用した意見発表や意見交換

この中でも特に⑶における次の考察が示唆的である。

> 今年度の実践では、授業やプレゼンテーションをしているときに、話を聞きながら気づいたことを書き留めさせていくという活動を試みた。これにより、人の話を聞くときは反応してはいけないということから、かぶせて話すのは従来通り、よくないが、ネットワークの特定の場所に書き込むことで考えを表現するということが実行できるようになった。従来は生徒に質問

を求めても、なかなか出て子(ママ)なったり、声の大きい者だけが質問できるという状態になりがちであった教室から、全員が等しく授業内で意見を述べる機会を時間的にも精神的にも与えられ、それに基づいた授業展開をすることにより、より参加している感覚を持ちやすい授業が実現したと言える。[18]

「話を聞きながら気づいたことを書き留めさせていくという活動」が取り入れられることによって、従来の授業では発言が出来なかった学習者が自分の考えを「書き込む」ことで表現できるようになり、授業に「より参加している感覚」を持ちやすくなるというメリットが指摘されている。これは、論者が取り上げた Comment Screen によるメリットとも重なる点でもあり、匿名性があればより意見も活発に出るのではないかと考えられる。

また、青柳が実践しているブックトークの実践などでも、Comment Screen を取り入れることで、発表中に問いかけを入れて反応させてみるなど、聞き手を意識したプレゼンテーションの力を養う練習も可能となるのではないだろうか。

ただし、大学での導入とは異なり、中学、高等学校では学習者 1 人 1 人がスマートフォンを持っているわけではないことを考慮に入れると、1 人につき 1 台、タブレットなどの電子機器が配布できるという環境が整っていることが使用の条件となってしまう点には留意すべきであろう。

５　おわりに

本稿では、大学教育、および中等教育における Comment Screen の利用について、考察してきた。匿名性や即時的に反応ができること、授業者と学習者、学習者同士での共有もスムーズにできることなどが大きな利点として挙げられ、今後さまざまな場面で活用することができるのではないかと考えられる。

これまでの大学教育の実践では、双方向型かオンデマンド型かで二分化していたが、これから先、対面授業が増えていくことが想定される中で、オンラインや ICT をいかにうまく組み合わせられるかが課題となる。そうした大学の状況を先取りするように、中等教育ではすでに対面でのオンラインの活用が模索され始めている。様々なツールを用いて実践が積み重ねられていく一方で、飯野久美（2016）が「何を目的に ICT を使うのか、どんな授業を展開したいのか、ICT を導入しようとするとき、教員はあらためて自分の授業を厳しく見つめ直す必要があるだろう」と指摘するように、あくまでも方法として ICT を活用していくことが求められるだろう。

[18] 戸川貴之（2021）「令和二年度帯広北高等学校におけるＩＣＴ教育機器を用いた国語科教育の授業改革」『国語論集』(18)、pp.325-326

引用・参考文献

青柳圭子（2020）「国語科における ICT 活用の可能性と課題 ： 中学校 1 年生の実践を通して」『成城大学教職課程研究紀要』（2）,pp.33-39

飯野久美（2016）「国語科における ICT 活用の可能性 (シンポジウム 国語科教育におけるマルチメディアの活用)」『早稲田大学国語教育研究』（36）,pp.38-45

大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介編（2020）『遠隔でつくる人文社会学知：2020 年度前期の授業実践報告』雷音学術出版

大嶋えり子、小泉勇人、茂木謙之介編（2021）『オンライン授業の地平―2020 年度実践報告―』雷音学術出版

北野優樹、田中満公子（2019）「高等学校国語科における ICT 活用を通した情報活用能力の育成に関する授業実践」『教育実践研究』（12）,pp.47-57

小池由美子（2020）「ICT を活用した個別最適化の授業事例 ―国語科の指導法に関する授業研究―」『児童文化研究所所報』（42）,pp.11-18

髙井太郎（2018）「ICT を活用した作文ワークショップの実践――1 人 1 台の Chromebook が使用可能な中学 1 年生を対象として――」『国語科教育』（84）,pp.49-57

田中宏幸（2021）「オンライン授業による日本語文章表現指導の開発」『安田女子大学紀要』（49）,pp.1-12

戸川貴之（2021）「令和二年度帯広北高等学校における ICT 教育機器を用いた国語科教育の授業改革」『国語論集』（18）,pp319-328

野中潤（2017）「教育 ICT と国語教育学の課題（1）」『都留文科大学研究紀要』第 85 集、pp.95-96

野中潤編著（2019）『学びの質を高める！ICT で変える国語授業―基礎スキル＆活用ガイドブック―』明治図書出版

野中潤編著者（2021）『学びの質を高める！ICT で変える国語授業 2―応用スキル&実践事例集』明治図書出版

藤田勝如（2016）「国語科における ICT 機器の活用」『大阪教育大学情報処理センター年報』（19）,pp.52-53

吉見俊哉（2021）『大学は何処へ 未来への設計』岩波書店

文部科学省（2020.12.23）「大学等における後期等の授業の実施状況に関する調査」
https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index_00012.html（最終閲覧日 5 月 30 日）

『朝日新聞』（2021.5.17）「オンライン授業、大学教員の本音　動画予習で効果／取り残される学生に懸念　東大が全国調査」,朝刊,p.19,聞蔵 II ビジュアル,
http://database.asahi.com/library2/main/top.php（最終閲覧日 2021 年 5 月 30 日）

（広島大学大学院博士課程後期３年）